



主夫に支えられて



九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科准教授

和田由美子 (わだ ゆみこ)

1998年、筑波大学心理学系助手。2000年、理化学研究所ゲノム科学総合研究センター研究員。2006年、健康科学大学健康科学部福祉心理学科准教授。2010年より現職。専門は実験心理学(生理、比較)。

研究所の研究員時代に娘を出産し、今年で8年になります。現在、娘は小学2年生。私は私立大学教員として、夫は在宅ワークをこなす兼業主夫として、昨年の4月から家族3人熊本で暮らしています。この8年の間に、研究所の移転が1回、勤務先の変更が2回、それに伴う引っ越しが3回。仕事と居住地が変わるたび、夫と私の家事・育児分担のあり方も大きく変わってきました。

「なんとかなる」と思えるまで

夫と私は同じ研究室で、私が大学助手、夫が大学院生の時につくばで結婚しました。私が横浜の研究所に勤務することになったとき、夫は大学院を退学し、横浜のシステム会社に就職しました。同居を前提に夫が仕事を選んでくれるおかげで、現在まで一度も別居せずにすんでいます。横浜では夫婦ともに多忙で、いつかは子どもを持ちたいと思いつつ、それどころではない状況でした。ママ研究者の先輩に出産のタイミングをたずねると「そのうち『なんとかなる』って思えるときが来るよ」とのことで「ああ、自分はまだなんだな」と妙に納得したことを覚えています。それから2年後に突然「なんとかなる」という気持ちたちがムクムク沸いて来て、まもなく妊娠・出産しました。

「どうにもならない」時期

職場には産後3ヵ月で復帰、6ヵ月で研究所が移転し、横浜から

またつくばに戻りました。夫は片道2時間かけてつくばから横浜に通うことになり、夫が自宅近くの会社に転職するまでの期間、平日の家事育児は私の担当となりました。幸い自宅から車で1時間のところに夫の実家があり、義父母のおかげでなんとかこの時期を乗り切ることができました。育児のほうはなんとかなりましたが、研究のほうはさんざんな状況でした。圧倒的に時間が足りず、頭もまわらず、さらに病気がちで、周囲に迷惑をかけてばかりの心苦しい毎日でした。こんな状態にもかかわらず、多方面からサポートしてくれた上司と同僚には、本当に感謝しています。

娘が3歳のときに山梨の大学への就職が決まり、家族で河口湖に引っ越ししました。夫はつくばのシステム会社に在籍したまま河口湖で在宅勤務することになりました。在宅とはいえ会社勤務なので、9時から18時までにはスカイプ接続でPCに張りつき、夜は在宅残業、急な出張もあり、見ていてかわいそうになるくらいの忙しさでした。周囲に頼れる親戚もなく、家事育児は主に私が担当。大学は研究所より時間の自由がきくので、大学の業務と育児はなんとか両立できました。研究のほうは相変わらず全然進みませんでした。

研究と育児の両立をめざして

夫は仕事が一段落したところから会社を退職し、フリーの在宅ワー

カーとなりました。もとの勤務先の仕事は大部分でしたが、仕事量を自分で調節できるぶん、だいぶ時間の自由がきくようになりました。「いざとなったら遠慮なく夫に頼める」という心の安らぎ感は自分でも驚くほど大きいものでした。頼めるとなるとなんでも頼んでしまうのが人情。最初の頃の夫は「言ってくればやる」という態度だったので、「指示出し」の心理的負担感がありましたが、だんだん主体的に家事・育児に取り組んでくれるようになりました。おかげでお母さんモードを解除して、仕事に専念できる時間が少しずつ増えてきました。

昨年家族で熊本に引っ越し、また新しい生活が始まりました。今の大学は夜間や週末に大学の業務が入ることが多いため、夫の家事・育児の分担率は上昇する一方です。夏休み中の学童保育のお弁当づくりも、娘の学校への持参物や宿題のチェックも、登校時の旗ふりも全部夫がやってくれています。熊本は食材が豊富なため、夫の料理の腕前もどんどん上昇しています。私の研究のほうは相変わらずの状況ですが、「どうにもならない」時期を過ぎ、今年くらいから少しずつ「なんとかなる」気がしてきました。最近家事・育児から離れているので、小2の娘は完全なお父さん子に育っています。若干の疎外感を感じる今日この頃、仕事と家庭生活の両立をめざし、引き続きがんばっていきたいと思います。